

業として全て一括してしまったとしても、それなりに理解できると思われる。又、一般的に当時の中国人が、訳了後の梵本には興味が薄い事をも考慮すれば、序の三本を『宋訳』『魏訳』の漢訳二本と、五本であったかも知れない梵本写本を一括して、としたものと考ええる事も可能ではないだろうか。

— 未完 —
 〈参考〉外山軍治著『則天武后—女性と権力—』

法華經における地涌菩薩の戲曲的表現と仏教思想史的意義(その二)

林 円 修

地涌の菩薩は教主釈尊の本化として末世弘通の主役として登場する菩薩で一切經中に例のない異色の菩薩である。(第二類)

古来先師によって教理的解釈がなされ、近年では布施博士が「布属の菩薩法」として解説されている。私は仏教思想の展開と實際問題をふまえて考察し法華經精神を知る裏づけとしたい。

原始法華經第一類(A・D初・中頃)は開會思想で一貫している。声聞、緣覺の二乗を仏の方便説として開會し一仏乗を高揚する趣旨で、教団の實際問題が主題となっていることに注意したい。

第二類成立の頃(A・D百年前後)となると教団の動向は教理思想の発展に伴って實際信仰も多岐化し大小乗各派の様相も複雑化して種々の対立も激化した。ただし末法思想が流行したのも当然といえよう。(主なもの挙げらる。)

①舍利供養、經卷供養に伴なう塔や廟の建立供養(塔觀問題)を始めとして ②菩薩思想の発達と新しい乘觀問題:新しく菩薩乘が展開 ③過去仏、未來仏信仰や淨土往生思想の流行 ④仏身觀の発達と諸仏諸菩薩信仰 ⑤仏陀觀教主觀(本尊觀)の差異と信仰上の問題 ⑥人間の解脱觀成仏觀の主體的実践的な問題等々……法華經は會三歸一の出發的精神からも之らの課題に対決を迫られたわけである。法華經が独自の「多宝塔觀」を示して塔觀問題を解決したことから知られる。(布施博士は第二類成立の主要因とせられる。)しかし今見る如く發展仏教の實情は塔觀問題のみでかたずかぬ深刻な内容を示している。すなわち塔觀問題は教団の實際問題として確

かに大きな課題にちがいないがそれはあくまで表面の問題である。(いわば三角型の頂点であるが底辺ではない)ことを洞察した法華菩薩団(第二類編者)は、第一に發展仏教が宗教信仰としての本質問題は塔観よりも教主観、本尊観、を正しく宣揚すること。第二には仏教徒一般の主體的な解脱觀成仏觀を明らかにして万人救済の道を実践的に顯揚すること。しかも之は菩薩乘觀の新しい展開をふまえて解決すべきことを確認した。換言すれば以上の二点こそ根本正法を以て任ずる法華菩薩団に与えられた發展仏教の根本的課題であると確信した。この二点こそ發展仏教が世界の宗教信仰として果して永遠の生命を保ち得るや否やの鍵を握る本質的命題なるを洞察し、しかもこの二点はいくまで密着關係にあり同時に解決すべきを確認した。かくして法華經は之と真正面から四つに取りくんで成立するにいたった。(紙面の都合で要点のみとする。)

◎第一に法華經は八十才で入滅された現身仏の教主釈尊をそのまま開顯して久遠古仏常住不滅の本師本仏とし分身説を釈尊に直結して諸仏諸菩薩信仰や諸天諸神信仰を止揚し統一して仏教徒の帰依すべき本尊と教主觀とを宣揚した。そして教主釈尊の常住不滅を表現するために

種々の苦心を払っているが本願救済思想を本仏の大慈大悲の仏心として三世益物思想を打ち出し末世衆生の救済が本意なることを予言的啓示的に表現している。(如来寿命品が中心)

◎第二に法華經はその本師釈尊の本化として地涌の菩薩を登場させ独自の布風論を展開することによって一乘法華の独自の成仏觀(菩薩觀)を宣揚した。(涌出、寿命、神力品等が中心)

以上の二点は諸經典の追従を許さない法華經の大旗幟となつてゐる。法華經はこの二点を巧みな文学的表現と戯曲的構想とをもつて信徒一般に示すことによって複雑化した仏教信仰を統一し發展仏教永遠の扉を開こうとしたものである。

弥勒菩薩をして「不見不聞」「不識一人」と発言させたのは単なる未來仏信仰や往生淨土信仰を否定した意が洞察される。又単なる過去仏信仰とくに教主釈尊を忘れた諸仏諸菩薩信仰は仏教の本道でないとして之も止揚している。(多宝如来、宝塔品)

法華經の主張する地涌菩薩は信仰の対象としての単なる菩薩神でなく人間が自己自身に体现する菩薩行人の菩薩であり伝道菩薩である。

一乗法華を広宣する者は万人が地涌の菩薩（母の子）である。法華経は教主釈尊前生の「積功累徳求菩薩道未嘗止息」の菩薩の精神をとらえ「善学菩薩道不染世間法」と吾も人も教誡する菩薩である。久遠の本師教主釈尊の「毎自」の本願の中に安立し、心もおだやかに安らぎ浄らかな心で人々と共に喜び共に悲む菩薩である。人々と共にこの娑婆世界の中に安住し「如蓮華在水」の悟りの境地にあつて、しかも一乗法華の仏道、菩薩道を求めて止まない「昼夜常精進」の永遠の菩薩である。

後世、日蓮聖人が上行菩薩の自覚に立って、末法応時の本門の法華仏教を創唱されたが、この点天台大師よりも一層本源的に法華経の精神を悟られたものといつてよからう。（未完）

十界構造論

——四面の構造——

服部 即 明

十界を心の構造として把える時、四面体として考えら

れることは前回論証した。今回は交流分析の所見を参照し、それぞれの面の特質を述べる。

1、交流分析

エリック・バーンが創始し、精神分析の口語版と言われる。人格を形づくる自我状態を親の心P、大人の心A、子供の心Cの三つに分け、更にPを保護者的なPと偏見的なPとに分け、Cを自由なCと順応したCとに分ける。Aは理性と深く関係しており、適応性や統合性を持ち、冷静な計算にもとづいて働く。自我にとって大切なことは、PACがくつついて全体をなすと同時に、それぞれが独立した状態にあることである。これら三つの自我状態の境界には半透過性の膜のような物があり、それを通して一つの状態から他の状態に精神エネルギーが移動すると考える。一つないしそれ以上の自我状態が人格の全体から締め出されている状態を「除外」という。一つの自我状態の精神エネルギーが他の自我状態に自由に流れ込むことを「汚染」という。交流の場で自分はPACのいずれを向けているのか。又彼は自分に対していずれを向けて来ているのかを、言葉や行動から分析し、Aによる対処の仕方を考えようとする。更に深くはゲーム分析、脚本分析等興味深いものがある。